

はくぼく

No.224 2015-9-23(水)

責任者 三浦真吾
事務局 吉田朝夫

剣路市美原3丁目57-4 TEL 36-7426

二泊三日宿泊研修の旅終る

【九月七日からの三日間、十勝川で開催。二十一名の参加】

去る九月七日から九日までの二泊三日、十勝川温泉のホリデーイン・ホテル十勝川において、年金者組合と共催の「宿泊研修の旅」を実施しました。

今回は、二十一名の参加者でしたが、それぞれの予定と重なり、一泊の参加が六名もあり、今までは無い参加態様の旅行でした。それでもみんな元気な顔で、楽しいひと時を過ごしてきました。パークゴルフに興ずる人、ゆっくり部屋でくつろぎ、オシャベリをする人…と、いで湯の旅を満喫しました。二日目の学習会では、新聞紙上でご存知と思いますが、「七月十四日・剣路空襲」という紙芝居を作成した退職教会員の釜薙健さんに参加していただき、ご披露していただきました。

当時は小学生の一年当時、剣路の繁華街一帯が、空襲を受け、防空壕に逃げ延びながら、燃え上がる黒煙を見た、正に七〇年前の記憶を釜薙さん独特のタッチで、描いた作品で、逃げまどう人の表情の細かいタッチや色彩は、真に迫るものがありました。捲りながら語ることも、真に迫るものがあり、見る者に感動を与える素晴らしい作品でした。さすが釜薙さんだなぁと感心しました。そのあと、「戦後七〇年を語る」と題して、それぞれの戦後七〇年を迎えての諸々の想いを語ってもらいました。その切り口として、「一少年の十五年戦争」と題して、私吉田の十年前に綴ったプリントを提示して、話題提供をしました。生まれた時から戦争時代の真只中、「勝つてくるぞと勇ましく、誓って国を出てからは…」「今日も勉強できるのは、へいたいさんのお陰です…」「天に代わりて不義を打つ、忠勇無双のわが兵は、歓呼の聲に送られて…」と、軍歌の真只中で育つて、正に軍国少年一筋の中で育ち、大きくなったらへいたいさんになってお国のために戦い、靖国神社に行くのだと叩き込まれ、それが当たり前の生き方だったので。しかし、戦場で敵と戦う軍人も大変だったでしょうが、銃後で戦に勝つためと…日常生活を制限され「贅沢は敵だ」と、食糧・着るもの・金属供出…と、我慢と質素倹約を強いられる生活は、弾丸の危険はありませんが、戦場の兵士と同等のつらさ苦しみがいとも背負っての暮らして、敗戦前のころは、何時わが町が空襲に遭うか、いつもビクビクした生活の毎日でした。その中での幾つかの一少年の体験を語りました。教育勅語、戦勝勝利のための標語、終戦までの流行歌の変遷。軍歌などの資料を添えて三〇分程度語りました。その後の話の中で、樺太で終戦を迎えた大先輩の大黒さん、樹下さんお二人の苦難の中から選んだこと話や、根室で空襲に出会った池田さん。戦後の食糧難で苦労した橋本さん等々、それぞれの戦後七〇年の生き様を交流しあいました。それにつけても、再び戦前に向かおうとしている国会での安倍内閣の「戦争法案」に対する怒りの発言は、話の端々に滲んでいました。全員の発言は大変貴重なもので有意義な学習会でした。夜の交流会も楽しく酒井さんのマジックなどがあり、皆さんに満足して頂いたと思います。

九・十月のパークゴルフの案内

九月のパークゴルフをお知らせいたします。八月は参加者が少数でしたので、中止となりました。九月は是非たくさん参加して下さい。

◎ 九月のパークゴルフ

- ・ 期日 九月二十九日(火) 午前九時半集合
- ・ 場所 剣路市高山パーク場 (有料です) 現地集合

◎ 一〇月のパークゴルフ

- ・ 期日 十月三〇日(金) 午前九時半集合
- ・ 場所 剣路市高山パーク場 (有料です) 現地集合

※一ヶ月続けて案内しましたので、お忘れないうちに…

ゆき届いた教育を求め 全国署名の用紙がきました

秋のシーズンに入り、年中行事の活動の一つである「ゆきとどいた教育を求め全国署名」の用紙が届きました。またか!と嫌悪を感じると思いますが、果実の国会で衆参議員で、強行採決された「戦争法案」の悔しさを思い返し、その怒りを、この署名にぶつけて下さい。いつも大量に集めてくれる高橋さんが、体調をくずし、杖をついての歩行のようです。一人一人の子どもが経済的に心配することなく、ゆき届いた教育を受けられるようにするためには、教育予算を大幅に増額し、教育諸条件の整備に力を尽くすことが求められます。安倍首相は、憲法違反の「戦争法案」を強行採決をしながら、教育の内容に対して、あれこれと干渉し続けています。戦争をする国への下ごしらえとして、教育の中で銃を持つ子を育てようとの思いが窺われます。

そんな世情の中で反撃する意味でも、この署名を大きく広げたいと思います。九月から十二月までとなっていますが、剣路の集約を十一月末としていますので、短期決戦で、十月中に取り組んで欲しいと思います。ひとふんばりがんばって下さい。

・ 一人二枚(二〇筆)を同封しました。もっと頑張れると意欲のある方はご連絡下さい。用紙は十分用意してあります。

全教組の事務所にも置いてありますので、ご利用下さい。

戦後七〇年それぞれ八月十五日

朝鮮人労働者と終戦

高橋 茂雄さん

(1) 取材のきっかけと現地湧別訪問

北海道文化放送（UHB）の永井デレクターから、戦後七〇年のドキュメントを何回かに分けて放映したい。その一つ「雄別炭鉱の朝鮮人強制連行に関わる証言者として取材を受けて欲しい」という電話を受けたのが、七月二十二日でした。丁度、「腰部脊椎管狭窄症」という病名を貰い、右脚の付け根から足首まで、痛みとだるさに、四六時中悩まされている時だったので、断ろうと思っていたのですが、今の安倍政治の危険な流れはなんとしても断ち切らなくてはという思いが強く、しかも、デレクターの父が、中学校時代の恩師ということが分かり、引き受けることにしました。

映像を見てもらえば分かりますが、杖をついた痛々しい姿をさらけ出す事になってしまいました。八月二日、打ち合わせ。そして、八月四日、カメランと助手、永井氏の四人で出発。途中、阿寒支所の担当者と合流して雄別に向かいました。放映時間は、6〜7分程度ということなので、二時間もあれば終るだろうと思ったのですが、炎天下の中、撮影の取材は、七時間にも及びました。アブやら、蚊が大量に襲いかかり、とりわけカメランは途中で止めるわけにいきませんから、顔、腕などをさされて、赤くはれ上がっていました。スタッフのいい番組にしようという熱意と、ねばりに頭が下がりました。

(2) 放映された内容

八月十日、午後六時半ごろから、UHB「みんなのニュース」の中で、ドキュメントの一回目として、放映されました。（全4回）

●雄別炭鉱は、閉山して四十五年になりますから、町中は草木でおおわれ荒廃の中にありました。わずかに 総合ボイラーの煙突、購買会（今のスーパー）病院、風呂跡、坑口などが残っており、それらを説明しながら、インタビューを受けました。中心は、最も多い時には、坑内労働者の五十六%を占めた強制連行された朝鮮の人たちのことでした。家族から引き離され、人間としての扱いを受けず、過酷な労働と暮らしを強いられた朝鮮の人たちを、子どもとはいえ、それを当たり前と想っていた当時の自分を恥ずかしく思います。

●番組の中で、「日本がいつか来た道を、再び歩むのではないかと、高橋さんは、危機感を持っている」とアナウンサーが話し、それに対して自分は「歴史を正しく見ないと、人間は前に進まない、日本が何をやったかということ、率直に反省していくことが一番大事」と発言しています。最後にアナウンサーとコメントイターが、「八月十四日に発表する安倍総理談話は、日本が過去を直視するのが問われている。」「貴重な意見だった。実体験した人の言葉は重い。それを受け止めた上で、安倍さんはどうするのか。そして、我々はどうしなければいけないのか、考えなければならぬ」と結んで終わりました。

※番組のDVDもっています。希望する人には、お貸しいたします。

(3) そして「安倍七〇年談話」

八月十四日、安倍首相は「戦後七〇年談話」を閣議決定し発表しました。その内容は、「侵略」「植民地支配」「反省」「お詫び」という文言はあるものの、自分の意志、認識として語っておらず、自分が番組で言った、歴史を直視せず、戦争の過ちに、目をつぶるものとなっています。欺瞞に満ちた文章を、恥ずかし気も無く、述べる首相に、日本の未来を託すことなど絶対にできません。恥ずかしい限りです。

涙一滴 票一票

深見 迪さん

ぼくはマイクを握りしめ訴える
働いて働いて、働いて子育てをして
この町をつくってきた高齢者の人たち
介護が必要になった時

高い保険料、介護サービスの切捨てとは
何と言う仕打ちか
これが政治のすることか

町の人たちは身じろぎもせず聞いている

「戦争法案」が五月にも提出されるとい
前の戦争の反省から憲法九条をつくり
みなさんが七〇年守ってきた平和な国日本
平和も憲法九条も無傷なまま
子どもたちに引き渡すこと

これは私たち大人の役割、政治の任務

町の人たちが頷くのが見える

高齢者と子どもたちに

やさしく豊かなまちづくり

一緒に作っていいこうではありませんか

選挙戦は共感を作る場所

一つ一つの共感が票になって

ぼくの背中を押してくる

ぼくは泣きながら訴える

話し終わって握手をしに行く

みんな目頭を拭いている

運動員が

「泣きながら演説していましたね」

と、笑いながら嬉しそうに言ってくる

ぼくは言い返す

「涙一滴、表一票です」

そうしてぼくは

四期目の当選を果したのです

2015年4月26日